

地域における取組事例

事例 1 江戸川区総合体育館

施設スタッフ（指定管理者）と地域が連携し、「障害のある人の受入れにNoと言わない」をモットーに、積極的に障害のある人の利用を促進しています。

様々な取組で障害のある人が利用しやすい雰囲気につなげており、障害のある人も利用しています。



● 安心して利用してもらうための工夫

江戸川区内の各体育施設には「スポーツコンシェルジュ」と呼ばれるスタッフが、利用者からの問合せや、利用にあたっての相談に対応しています。また、スポーツコンシェルジュが施設でのパラスポーツ教室の講師も務めています。問合せで相談したスタッフが教室の講師を務めることが安心感につながり、参加しやすいと好評です。

また、各施設のスポーツコンシェルジュは毎月集まり、相談者への対応や教室での様子などの事例を共有しています。



スポーツコンシェルジュによる相談対応の様子

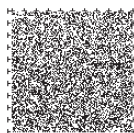
● 多種多様なスポーツ教室から施設の一般利用へ

障害の有無を問わず参加できるボッチャや、知的障害児対象の運動、知的障害のある人向けのバスケットボールなど、様々なスポーツ教室を実施しています。チラシに講師の写真を掲載することで、参加する障害のある人の不安を解消しています。また、教室の参加をきっかけに、施設の一般利用につながっている人もいます。

なお、毎月第1水曜日の夜間は車いすバスケットボールの開放日としており、車いすバスケットボールと一般スポーツのバスケットボールが体育館を半面ずつ使用しています。



車いすバスケットボールの開放日の様子



● 地域との連携から一般利用へ

江戸川区総合体育館の向かいにある特別支援学校の生徒に来所してもらい、施設の使い勝手などの意見を聞いています。また、リハビリ後の運動場所を求めている人のニーズにも応えています。

● 意識向上を促す人材育成

江戸川区では初級パラスポーツ指導員養成講習会を区主催で開催しています。同講習を通じて資格を取得した人は「えどがわパラスポアンバサダー」として区のパラスポーツイベントなどで活躍しています。江戸川区総合体育館では初級パラスポーツ指導員の有資格者は8名おり、資格を取る過程で障害のある人への意識が変わる人が多いため、資格取得を推奨しています。



講習会の様子

事例 2 荒川総合スポーツセンター

荒川区は2019年の荒川総合スポーツセンターの改修にあたり、障害者団体や区のバリアフリー協議会等に意見を聞き、障害のある人だけでなく、子供から高齢者まで優しい施設づくりを行いました。また、利用者の声に耳を傾け柔軟に対応する姿勢や、スタッフによる積極的な声かけなど、ソフト面においても誰にでも優しい施設づくりに努めています。



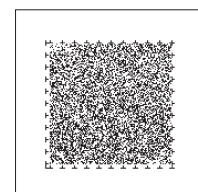
● 利用者の要望に「できる限り応える姿勢」

荒川総合スポーツセンターでは、「小さなことから大きなことまで利用者の要望には可能な限り応える」をモットーにしています。

- ・「会議室で卓球バレーができないか」との要望に対し、団体と相談を重ねました。安全面に配慮し、倉庫から会議室への卓球台の移動等は施設スタッフが行う一方で、団体でできる範囲の準備は団体が行っています。
- ・電動車いす利用者から、「濡れたレインコートをバッグなどにしまって館内に持ち込みたくない」との声を受け、ハンガーラックにS字フックを掛けた「レインコート置き場」を入口に設置しました。



館内正面の見えやすいところに設置



● スムーズな受入れを支える人材の育成

荒川区は独自で「荒川区障がい者スポーツサポーター養成講習会」を荒川総合スポーツセンターで実施しています。講習会は講義と実技の2日間開催し、視覚障害の疑似体験や車いすの介助、競技用車いすの体験などを行います。サポーターに登録されている人は、区のスポーツイベントで活躍しています。



実技の講習会の様子



● 利用者目線に立った工夫

- ・剣道場にはスロープがあり、手すりには緩衝材を巻くなど衝突防止のクッションを付けています。また、柔道場には、車いすで乗り降りできる昇降機があり、その周りにも衝突防止のクッションを取り付けています。
- ・扉の開閉が難しい人には、貼紙等でインターホンの使用を呼びかけ、スタッフが直接扉を開ける等の対応をしています。
- ・トイレの個室ドアが内開きの場合、中で人が倒れたなどの緊急時には、ドアが開かないことがあります。荒川総合スポーツセンター内のトイレは、ドア上部にあるスライドを動かすことで外開きに切替可能です。
- ・職員向け接遇研修に、筆談ボードを使ったコミュニケーション、手話（挨拶程度）などを取り入れています。

卓球バレー団体の声



東京北卓球バレー同好会
福田 彰さん（代表・写真右）
菅沢 良江さん（写真左）



会議室での活動の様子

施設の方は卓球バレーのことはご存じではありませんでしたが、前向きに聞いて、受け入れる方向で考えてくれました。利用開始後も、卓球台の準備・片付けなどを手伝っていただけて助かっています。純粋にスポーツをしたいというのが私たちの願いです。あまり構えずに相談に乗っていただける施設が増えるとうれしいです。

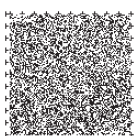
施設スタッフの声



荒川総合スポーツセンター 館長
濱田 勇二さん

お年寄り、お子さん、障害のある人など誰もが、ハード面でもソフト面でも利用しやすい施設であることを一番に考えています。困っている姿を見かけたらこちらから声をかけ、何か言いたそうだけど言いにくそうにしている人を察知して対応することを心がけています。

利用者の困りごとを最も把握しているのは受付スタッフです。そうした事例を全スタッフが共有し、「こうしてみたらどうか」とアイデアを出しますが、本当にそれでいいかどうかはこちら側の判断だけでは不十分です。「こう考えています」「こうしてみましたが何かご意見があったらお願いします」とお聞きすることが重要だと思います。



事例3 武蔵野総合体育館

武蔵野総合体育館では、心のバリアフリーを進めるため、利用者一人ひとりの障害の状況や利用目的をスタッフ全員で理解し、気持ちよく施設利用できる環境を提供することを心がけています。



● 適度な距離感で利用者を支えるスタッフ



施設利用前の受付



トレーニング前の検温



トレーニングの様子

脳性まひの障害のある保坂琢夫さんは、トレーニング室を利用しています。受付で利用者カードを渡したり、検温、除菌グッズの受け渡しをしたり、スムーズにやりとりしています。マシンのところまで移動してトレーニングをしている間は、スタッフが近すぎず遠すぎずの距離で見守ります。スタッフの対応でバリアフリーを実現しているのです。

利用者の声



保坂 琢夫さん
(脳性まひ)

スタッフの皆さんそして他の利用者さんともよくお声をかけてくださり、楽しく利用しています。また、スタッフの皆さんは私が見える位置で見守ってくださっているので、安心して利用しています。

施設スタッフの声



武蔵野総合体育館
トレーニング室スタッフ
宇田川 泰明さん

私たちが心がけているのは毎日の体調をお聞きすることと、近くで見守っていることです。他の利用者の方も保坂さんのことを気にかけてくれるので、安心していきますし、ご自身も話をしながら楽しくトレーニングいただいていると思います。

